

# 海外の基礎看護教育課程における国際看護学とは—文献レビュー

Global nursing education in overseas undergraduate nursing course – A literature review

○山田智恵里<sup>1</sup>, 長嶺めぐみ<sup>2</sup>, 大植 崇<sup>3</sup>, 森 淑江<sup>4</sup>

Chieri Yamada, Megumi Nagamine, Takashi Ohue, Yoshie Mori

1 福島県立医科大学, 2 群馬パース大学, 3 兵庫大学, 4 群馬大学

Fukushima Medical University, Gunma Paz University, Hyogo University, Gunma University

## 【背景と目的】

2013年に看護師国家試験出題基準において【看護の統合と実践】の中に「国際化と看護」がもうけられ国際看護学は修得すべき科目となり、2017年学士課程「看護教育モデル・コア・カリキュラム」がカリキュラム作成の参考として示された。一方国際看護学の分野は多岐に渡りすべての国際看護学分野を網羅できる人材の層は薄く外部講師に科目をゆだねざるを得ないという状況もある。各校の独自性は当然尊重されるべきであるが専門職の少ない国際看護学においてはカリキュラム構成要素の基本的共通理解を得ておくことは必要と考える。そこで日本の国際看護学教育の質向上のため海外ではこの学問をどのように捉え、どのような能力を付与しようとしているのかを調べ、日本の国際看護学教育に関係する知見を得ることを目的とした。

## 【方法】

研究は2020年6月-8月に実施し、方法は以下の通りである。

- 1 看護教育関連の情報収集のために利用するオンライン英語データベースを選出する。
- 2 過去10年（一部期間拡大）において、キーワードで索引した論文タイトルから研究目的に合致する論文を抽出する。
- 3 2の要約を精査し本研究の目的に関連する論文を入手、内容をまとめ分析する。

## 【結果】

医療、看護分野の学術論文データベース(Data Base: DB)として、PubMed, Cochrane Library, CINAHLを確認した。3DBに表1のキーワード組み合わせで検索し、PubMedのみ文献を検出した。Aは看護全般の文献が多く、かつBの文献を含んでいたことからBの合計110件を対象とした。このうちglobalとinternationalで重複する12件を除き要約から研究目的に合致する23件を抽出し全文を入手した。

表1 キーワードによる検出された論文数 PubMed

キーワード	論文数
A. Global/international nursing education, undergraduate	Global - 264 international - 271
B. Global/international nursing education, undergraduate course	Global - 54 International - 56

また PubMed に統合されている National Center of Biotechnology Information の DB から世界の 73 看護系雑誌を検出し、ホームページを有する 7 誌を選び出し各誌文献検索後上記同様要約を調べ 29 件の論文を抽出し全文を入手した。

計 52 件の論文(米国, カナダ, 英国, 中国, 韓国, タイ)をレビューし内容を分類した結果は以下の通りであった。

- 国際看護学教育とカリキュラムに関する見解・論評：グローバリゼーションと看護師の役割の変化, 世界の健康課題, 社会・経済・環境, 多文化理解, 移民, 平等・社会正義・人権としての健康などが構成要素として挙げられている。国際看護学の単独科目ではなく全科目へ国際看護の概念を入れるカリキュラムの提案,

実践報告の論文が出ている (11 件)

- 基礎看護教育で学生が習得すべき能力：どの国でも統一された能力基準はないが米国看護大学協議会諮問委員会(2006)などから幾つかの能力基準リストが提示されている。それらリストには世界の疾病発生状況, 社会・環境要因, 倫理・平等・社会正義, コミュニケーション, リーダーシップなどが共通しており, 実際に基準を用いて能力を評価した研究が近年報告されている (10 件)
- 海外実習の内容と有効性：数日~1 学期の期間, 選択科目, 途上国, 先進国, 国内避難民センターなどでの実習が示された。いずれも学習目的を達成し実習は有効であった(22 件)
- 国際看護学教育で学生, ナースが修得すべき能力の自己測定方法 (有料) (3 件), 国際看護学の方法紹介等 (6 件)

## 【考察】

国際看護学に関する見解, 論評は主に 1990 年代より発表され, 2000 年代に幾つかの団体や大学グループが小異のカリキュラムと能力基準を提案し, 2010 年代それらを用いて学生の修得度を評価する試みが出現していた。議論, 検証は今後も継続されると思われる。日本では前述のモデル・コア・カリキュラムで求められる能力として, 世界の保健・医療・福祉の現状と課題, 多様な文化における看護の役割, 健康課題と戦略, 等の理解と基本的な能力に基本的人権, 看護倫理の理解があげられ海外 (主として米国) との共通性が見られる。しかし現場の国際看護学カリキュラム内容, 具体的能力評価指標の提案や議論は十分とは言えずこれらの議論は進められるべきと考える。

また海外のカリキュラム構成要素に平等・社会正義・人権としての健康がほとんどの論文で挙げられていることが特徴的であり, グローバルな視野を広げる要素であるので日本の基礎看護教育でこれらの概念についても教育を検討されるべきと考える。

## 【結論】

海外では国際看護学教育のカリキュラム構成要素と能力基準が多く検討されている。日本においても教育成果を評価する能力基準についての議論が進み基本的共通理解が促進されることが国際看護学教育発展のために望ましいと考える。

## 【利益相反】

本研究に利益相反はない。

本研究は JSPS 科研費 (20K10612) の助成を受けたものである。